

（佳作）

二十世紀といわず今年から

萱野 茂

私は大正十五年、沙流川のほとり平取村二風谷に生まれ、物心ついた昭和の五、六年には祖母で、かつてに手を引かれ山菜取りに野山を歩いたものです。

当時のアイヌ婦人がそうであったように、口の回りと、手の甲からひじまで、いれずみをしていた人でした。言うまでもありませんが昭和の初年で八十歳を越えていた祖母は、日本語を全くといっていいほどしゃべる事が出来ず、孫の私との会話は完全にアイヌ語ばかりでありました。

したがって、山菜を取る場合の約束事も総てアイヌ風のアイヌ精神を持って私に教え、山を歩く時の心得から、小沢でどじょうなど小魚を獲る時にはどうすれば神様にしかられないかなど、こまごまと教え聞かされたものです。

しかも、それらの教えの多くは、ウウエベケレという昔話を通してでありました。

それでは、昔話はどうな時に聞かせてくれるかという時、時も場所もかまわずに、孫である私の名を呼び、近くでいることが分かると語りはじめるという具合でありました。九十歳を越えてからの祖母は目も耳も多少不自由でしたので、話相手の所在を確かめ、話の題をいい、聞いたことがある無しの返事を聞いてからゆつくりと言いはじめます。

そこで、私が自然に對しての考え方の多くは少年時代に祖母から教えられた事が主であり、小学校を終えて一週間ぐらい家にいただけで造林人夫として山へ入るなど、昭和三十三年までのきこり生活山また山の暮らしでした。

ですから、これから語ろうとする自然とのかかわりも、いい意味でのアイヌ精神、ひ

よつとすると古い話ではあつても現代の生活者が忘れている事を思い起こさず事が出来るかも知れません。

ここで沙流川の地形について簡単に紹介しますが、なぜその必要があるかという点、北海道で一番多くアイヌが暮らす事が出来たのは地形との関係が少なからずあつたからです。

源を現在の日勝峠に発する沙流川は、ほぼ正確に北東から西南に向かつて流れ、私が暮らしている二風谷を通つて太平洋にそそいでいます。

したがって日照時間が沙流川右岸と左岸ではかなり違ふらしく、山菜が芽を出す時季も右岸の方が半月以上も早いのです。それを知っている村人は最初は右岸へ行き、そちらが終わると左岸へ来るといふやり方が今も続いています。ちなみに沙流川の支流に額平川という川があつて、その枝川で宿志別という川がありますが、スクシ日光、ベツ川、アイヌ語で陽当りのいい川、東から西へ流れている川で一日いっぱい日が当たります。

この川は兩岸共いっせいに山菜が芽を出しあつという間に終わつてしまいます。そこへゆくと二風谷村は、右岸と左岸のずれがそれとなく新鮮な山菜をほかよりも長く村人に供給してくれていることになりす。

春先一番早く生える山菜はブクサリ行者にんにく俗にアイヌねぎですが、これを採取するにも、根っこを掘り取るような事はしませんでした。どのようにしてそれを規制し

たかと言うと、これもやはり民話で脅かしながら教えました。

あらすじをいうと、わたしには父がいて母がいて、貧乏な家の一人娘でした。うわさによると、隣村の村おさの妻が病気をしているという話でしたが、ある春のこと亡くなったという話を聞きました。おくやみに行きたいと思いましたが、持って行く供物も無いのと、着て行く着物もありません。仕方なしに、おくやみにも行かず、畑仕事に行き、お昼に粗末な弁当を広げ食べようとしていると、座わっている後へ人声がかかります。

誰だろうと振り返って見ると誰も居らず、声の主は萩でありました。「これ娘よ聞きなさい、隣村の村おさの妻が死んだ理由は、行者にんにくを取る時に根こそぎ取って、行者にんにくの神を殺してしまつたのだ。それを怒つた行者にんにくの神が村おさの妻を病気にして殺した、大急ぎで家へ帰り、乾してある行者にんにくを持って村おさの家の南斜面へ行き、行者にんにくの魂を返えすといいなが撒きちらしなさい。そうすると村おさの妻は生き返えるであろう」と、萩の神様が貧乏娘のわたしに教えてくれました。言われた通りにすると、村おさの妻が生き返りました。だから、今いるアイヌよ、山菜を取る時に根こそぎ取ってはいけません、と一人の女が語りました。と、民話の中で何回もなんかいも同じ話を聞かせそれを皆が守るようにして暮らしたのです。

例えばふきを切る場合でもアイヌであれば十本が十本全部切るような事はせずに、切りたいようないふきであっても二本か四本は残すようにします。その理由は、今年はふきが生えても来年はふきのとうになり、種が飛びふきが減らない事を知っているからです。

試みに秋一回か二回霜が降りたあと、霜で黒くなったふきの根を指先でほじって見ると来年の春のためにふきのとうの頭が隠れているのです。

それを知らない都会の人達は、ありつたけのふきを切つてしまい、何年かあとにあるいは次の年に行つて見ると、ふきは種が消すように一本も生えていません。辺りを見回し不思議そうな顔をしているのですが、アイヌに言わせると、ふきを殺してしまつたことになるのです。

さきほどいきました小魚を取る時も、平たい石を起こしてその下の小魚を抄い上げたあとは、石を必らず元のようにならなくします。

それは魚の寝床と考えそのように教えられたものです。山菜とのお付き合いは以上のようなものでありましたが、鮭などとはどうであつたのでしょうか。

沙流川での鮭の初漁はだいたい九月三日頃というふうに父は言っていたものでした。九月と十月に取る鮭は脂もあつてたいへんおいしいものですが、保存には向きません。

したがつて、その季節に取る分は毎日食べる量、それは自分の家でだけではなしに隣近所の老人家庭に分け与えるに必要な本数を取つて来ます。アイヌの村の村おさの条件は、ユクネチキ、カムイネチキ、アエアウナルラ、鹿や熊を隣の家へ運こぶほど私は狩が上手だ。自分さえ良ければいいと言うのではなく、一族全部が村人それぞれが食うに困らないほどたくさんさんの獲物を運んで来れる者、それが村おさになれる条件の一つでもあります。

十一月に入ると鮭は産卵を終えて、よたよたと川岸へ流れ付きますので、それをたくさん取つては背割りをして乾かします。この季節になるとはえも出ないので、うじのわく心配が全くありません。

それと脂が無いので次の年の夏を越しても脂焼けなどで、味が変わるような事も無く何年間も保存出来ます。鮭が四年目には成魚となつて母なる川へ帰つて来ることを、アイヌ達が知つていたかどうかは別として、毎年同じに取れるとは限りません。

それで万一にも取れない時に備えて保存食として乾し、家の中の火棚のもう一段上げて置くと、煤で真っ黒になるけれど虫も付きません。食べる時はぬるま湯にうるかし、たわしでのごしごと洗つて煮て食べるといふ具合でありました。アイヌの鮭漁というのは一方的に取尽くすというのではなしに、自然の摂理に従い資源が涸渇しないように産卵後の鮭を大量に集め保存食にし暮らしてました。

川へ鮭を取りに行き思ひのほかたくさん取れた時には、きつねの食う分として柳原へ置いて来ます。からすの分は砂利原へ置きますが、砂まみれにしないようにきれいに洗つて置くようにしたものです。

なぜかといえ、民話の中でからすにくれてやる鮭を洗つてやつた者と、砂まみれにしてやつた者が、神様から御札をしてもらつた様子の明暗がはっきりしていたからです。アイヌがそれら生物に餌を与える時に必らず言う言葉に、アイヌネヤッカ、カムイネヤッカ、ウレシバナヌブ、アコヤイラム、ベテツネクスというのがあります。この意

味は人間でも神様でも子育てには大変に苦勞が伴う、だによつて、神であるあなたがあなたの子供達と共に食べる分を上げましょう。というわけです。アイヌの狩人達は山で鹿を取った場合も肉の全部を持ち帰らずに、きつねの分は雪の上へ、からすの分は木の枝に掛けるという風に、肉の一部と内臓は残して来るように心掛けます。

それは鹿の動きを覚えてくれるのが、からすとかけすだからです。狩に山へ行き沢の向かい側の林の上に、からすあるいはかけすが舞うというか旋回していると、その下には必ずのように何かがいるからです。したがつて獲物を捜す狩人にとつては、それら鳥の動きが大きな目安になったわけです。ですから御札の印に肉を置いて来る事を忘れませんでした。アイヌ民族は自分さえ良ければよいというのではなく、総ての生物がある物を分け合つて食べようという気持ちがあるのです。

したがつて遠くへ見える山、近くを流れる川、沢などこれらの自然はアイヌにとつては神様であつたのです。山も木も川もみんな神様です。なぜ、それを神様と考えたのか、それは、自然全体、山も川も沢も、これらはいつても新鮮な食料を供給してくれる食料貯蔵倉であつたのです。

と言うことは、川があるから魚がいる、木が生えているから鹿がいる、そこへ行って食べ物を頂戴して来るという謙虚な心を常々持っていました。

このように自然を神と崇め、豊富にある物といえども乱獲を慎み、それによつて神と自然とアイヌの間に相互信頼が確立していたのです。

二十一世紀への提言など大きなことは言えませんが、目の前の問題として、アイヌ的発想のいくつかを申し上げたいと存じます。

その昔、自然河川へ鮭が遡上し産卵床を掘つて産卵を終ると、鮭のしっぽは使い古したほうきのように骨が見えるぐらになります。この状態をアイヌは、オイシル^{II}しっぽの擦れたものといいました。

こうなつたら、アイヌはそれをたくさん集めて保存用として乾かします。熊も長い冬眠に備え腹いっぱい食いつ力を付けました。

これは鮭ばかりではなく、むしろ熊が多く食う事が出来たのは、ますの方でありました。というのは、鮭が川を遡上するには水量に限度がありました、ますは沢の奥の奥まで遡上します。

沢の終点、それは山奥で熊の住み処であり、待つてさえいれば、ますは目の前まで来てくれる事を熊は知っていたのです。昭和十六年と十七年の二年間北海道庁の測量人夫として、沙流川の上流と新冠川の上流を歩いた時の事が今でも忘れることが出来ません。沢々の奥までますが遡上し、私共測量人夫と熊が文字通り邪魔し合うこともなく、それを取つて食べたものでした。現在はどうでしょうか。川というものは、あたかも人類だけのものと錯覚した人間が至る所にダムを築いてしまいました。

そのダムには魚道があるわけでもなし、ますや鮭のことなどちよつぱりも考えられてはいないのです。

川に鮭が来ない、ますが遡上しない、それだけを見れば、それでいいではありません。しかし、川に水が無い、魚が来ない、それによつて自然の均衡がどのぐらい失われたか、測り知れないものがあります。川の上流で鮭やますを餌に暮らしていた大形禽獣^{オウゴン}、きつねや熊、からすにふくろうなど、諸々の動物が待っていたのです。人間の作為によつて餌を奪われたこれら動物はどんなに悲しんでいることだろうか。

私が物心ついた昭和五十六年、夜になると近くの山々から聞こえて来た声は、ペウレブチコイキブ フムー、ペウレブチコイキブ フムー、という野太い声でした。それはふくろうの声で、珍しい声でもなければ、珍しい鳥でもなかつたのです。それが現在は幻の鳥といわれ、幻の鳥にしたのは、ほかならぬ人間なのであります。最初に住み処である森や林を乱伐し、餌場である川を干上げてしまったのです。ふくろうの巣は樹齢三百年以上の太い木でなければならず、それもうまく空洞になつていなければ役に立ちません。

してみると、里近くへ呼びもどすには至難の業であらうけれども、疑似木の空洞を作り若木の横へ取り付けるなどはどうでしょうか。

それには餌の供給が条件ですので、あちこちの河口にある鮭捕獲用の築を、三日に一回とか五日に一回は開けて上流へ魚をのぼらすようにしたいものです。

餌に必要な魚が来て巢に使えるものがあれば、幻の鳥にはならないような気がします。ちなみに、私が今まで見たことのある野生のふくろうは、昭和十年ごろ、隣にいた貝沢重太郎さんが、うさぎの畷^{うさぎ}にかかつて死んでいたので来たことがありました。

その次は昭和十六年、沙流川の左隣の門別川の上流で、こりの弟子をしていた時でしたが、仕事をしているすぐ側の立木の空洞から頭を出していたものです。その巢は、太い木の上を、すつと平に切ったようなものであったので、無理に横からの入口だけが必要でないのかも知れないなあと思っています。

三回目のふくろうは、五年ほど前に新冠川の河口の大木に止まっていたのを、私が発見し、友人の長井博カメラマンが撮影し、テレビにも放映されました。最初にも言いましたが、声だけは子供のころは何度も聞いていたし、その声は恐ろしくも聞こえたものでした。

昭和十四年から三十四年までは、こりとし山から山でしたが、その当時は木の伐り方も皆伐と択伐の二通りがありました。皆伐は文字通り全部伐つてしまい、そのあとへ植林をしたものです。

ところが、それぞれの営林署が独立採算制で仕事をせよ、となつてからは、本来の択伐の意味。「山林の樹木の生長量に見合う量の木を択んで絶えず伐採し、持続的に林の更新をはかること」などは無視され、世界に誇れた日本国有林も見ても無惨に伐られてしまいました。

それと、造林が総てと思われているらしい今日、自然の回復力の素晴らしさの典型の一つと思える場所があります。

それは、登別温泉のロープウェイに乗って山頂へ向かう左斜面の林ですが、あの場所は昭和二十九年の洞爺丸台風の際に一気になぎ倒された跡です。そのあとすぐから、まっつを植えられました。そのからまっつはあまり育たずに、いろいろな樹種が密生しています。

それを、ずーつと見て来た私は、やつぱり植林などはかなわない、見てくれ、この自然の回復力の素晴らしさ、と一人でたのしんでいるところがあります。

話がほかへ逸れましたが、熊と自然のかかわりについて触れてみることにします。登別温泉ケーブル会社の熊資料によると、過去百年の間に、北海道で野生の熊に襲われて死んだ人が百五十人と聞いています。

してみると、一年に一人半、この数字が多いとか少ないと言うのではありませんが、

ひよつとすると、このごろは一人半より多くなつていないでしょうか。

と、いうことは、熊の餌を絶つたのは人間なので、ここで本気になつて熊に御詫の意味もふくめて、ますや鮭を川へのぼらせる手段を講じてはいかがでしょうか。それによつて熊も危険を冒してまで人里へ近付く必要がなくなり、一人半が皆無になるかも知れないのです。ふくろうの項でも言いましたが、何日かに一回築のとびらを聞き鮭を上流へ遡上させることによつて、死の川に鮭がおどり、ますが跳ねたら、きつねも、からすも、ふくろうも、熊もどんなに喜ぶことだろうか。

二十一世紀など私は生きていないかも知れない事を考えるのではなしに、今年から来年から、ダムには魚道、そして上流へますや鮭を自由に遡上させたいもの、それが自然を守り育てる第一歩であろうと思います。

